

ヘブル人への手紙5章 「弱さの中の奉仕」

1A 大祭司の務め 1-10

1B 人々の弱さへの奉仕 1-4

2B 大祭司と呼ばれたキリスト 5-10

1C メルキゼデクの位 5-6

2C 苦しみの中での従順 7-10

2A 固い食物 11-14

本文

ヘブル人への手紙5章を開いてください。聖書の他の書でもそうですが、ヘブル人への手紙は特に、話が川のように流れていて、章で区切るとなんのことを話しているのかわからないという部分があります。5章の1節から読み始めますと、分からなくなります。この手紙全体で、著者は、イエス様が、いと高き方の右の座に着いておられる大祭司であることを伝えています。

主イエスは、どんなことが起こっていても、それを治めておられる御子であられます。同時に、私たちと同じ肉体を持ってください、その弱さを同情し、その肉体において罪の供え物になってください、ご自分の血を父なる神にお献げになりました。それで、罪が清められており、聖められたということです。大祭司であるイエス様について、詳しく語り始めたのが、4章14節です。「さて、私たちに、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。」そして、大祭司が私たちの弱さに同情し、罪は犯されなかったけれども、あらゆる試みを受けられたと15節で話しています。

1A 大祭司の務め 1-10

それで5章に入っています。5章では、そもそも大祭司とはどのような務めであったかを、当時のユダヤ人信者たちに思い起こさせています。私たち異邦人にとっては、なじみのない務めですから、ここでじっくり学びましょう。

1B 人々の弱さへの奉仕 1-4

¹ 大祭司はみな、人々の中から選ばれ、人々のために神に仕えるように、すなわち、ささげ物といけにえを罪のために献げるように、任命されています。

ここで強調していることは、「人々」です。人々の中から選ばれ、人々のために神に仕えています。人の弱さも含めて、人々の中で仕えるのです。私たちが主に仕えているうちに、キリスト者として生きているうちに、ふと忘れてしまうことがあります。それは、人としての感情や思い、そして体

感です。愛する人が死んでしまった時に、その時の悲しみをキリスト者になったらかえって無感覚になったら、本末転倒です。悲しみに押しつぶされない希望が与えられましたが、それでその悲しみを軽々しくみたり、見下げたりすれば、キリスト者の風上にも置けません。今、私たちはすべてが、祭司として召されています(I ペテロ 2:9)。

そして、祭司は、どのようにして人々のために神に仕えているかという、人が犯した罪のために、ささげ物を神に携えるところにおいて仕えています。神殿において、人々の携える牛や羊を屠って、その血を聖所の中に携えて、神に献げます。

そして、「任命されています」と言っています。自分で選んで大祭司になるのではなく、任命を受けて、大祭司になります。私たちも、主にお仕えするというときに、自分でお手伝いするというよりも、主によって召されて、選ばれて仕えるのです。

² 大祭司は自分自身も弱さを身にまとっている、無知で迷っている人々に優しく接することができます。

「無知で迷っている」というのは、善悪についてのまだ無知であり、それで迷ってしまっているということです。

大祭司は、血肉のある人です。だから、自分自身も弱さを身にまとっています。これが祭司の務めで本質的な部分です。弱さを身にまとっているからこそ、無知で迷っている人に優しく接することができます。これは、罪に対して妥協的になるということではありません。罪は罪として深い自覚を得るのです。けれども、自分があたかも正しく、その罪とは無関係であるという立ち位置で、罪に迷った人々を断じる時に、祭司の心とかけ離れる、つまり神のみこころから離れることとなります。

ガラテヤ書では、パウロが次のように話しています。「6:1-5 兄弟たち。もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。だれかが、何者でもないのに、自分を何者かであるように思うなら、自分自身を欺いているのです。それぞれ自分の行いを吟味しなさい。そうすれば、自分にだけは誇ることも、ほかの人には誇ることもできなくなるでしょう。人はそれぞれ、自分自身の重荷を負うことになるのです。」

ここでパウロが説明していることで、優しく接するということがどういうことか、お分かりになったと思います。自分自身が何様なのか？という事をよくわきまえるということです。罪に対して軽々しくみるということではなく、自分自身のことを考えたら、いつでも同じ罪を犯しうるということを知って、

それでその、過ちに陥っている人を助けるということです。イエス様が、姦淫の現場で捕えられた女について、彼女を守って、断罪していたユダヤ人たちに対して言われた言葉を思い出してください。「ヨハ 8:7 あなたがたの中で罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい。」そうしたら、彼らは年長者から始まり、一人一人去っていきました。

³ また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のゆえにささげ物を献げなければなりません。

大祭司は、年に一度、宥めの日、あるいは贖罪日とも呼ばれますが、その時に、イスラエルの罪のために、屠った雄やぎの血を携えて、それを至聖所にある、宥めの蓋の前で振りかけます。けれども、その前に雄牛を屠って、その血を自分と自分の家族のために振りまきます。自分自身の罪があるからです。

ここは、イエス様は大祭司と呼ばれても、有していなかったものです。4章 15節に書かれていたように、主は、「罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。」とあります。

⁴ また、この栄誉は自分で得るのではなく、アロンがそうであったように、神に召されて受けるのです。

大祭司の栄誉は、自分で得るものではありませんでした。アロンの家系のみから、大祭司が選ばれました。ですから、他の者が大祭司の職に着こうとするものなら、厳しく裁かれました。コラは、レビ人のケハテ族の者でありましたが、アロンとモーセに盾突いて、自分が祭司になろうとして、それで生きたまま、地面が割れて陰府に投げ込まれました。

主は、アロンを明確に名指しで召しておられましたね。そのようにして、先ほども話したように、自分で選ぶものではなく、主が選び、召されることなのです。イエス様は弟子たちに対しても、同じことを語られました。「ヨハ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。」

2B 大祭司と呼ばれたキリスト 5-10

1C メルキゼデクの位 5-6

そして次に、イエスご自身が神から召されて大祭司になったのだということを語ります。

⁵ 同様にキリストも、大祭司となる栄誉を自分で得たのではなく、「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ」と語りかけた方が、それをお与えになったのです。

主イエスは、このように神に語りかけられていました。「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ」というのは、詩篇第二篇からの引用です。ちなみに、これは肉体としてイエス様が誕生したことを意味しておらず、復活されて、公に神の御子であることが現れたことを意味します（使徒 13:33）。イエス様は、バプテスマを受けられた時も、また高い山に登られて、姿が変わった時も、父なる神から、「これはわたしの愛する子」と語りかけられていました。

自分自身で栄誉を受けようとするほど、愚かなことはありません。主ご自身が、ユダヤ人指導者らに対して、痛烈に語っておられました。「ヨハ 5:43-44 わたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。互いの間では栄誉を受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたが、どうして信じることができるでしょうか。」栄誉は神から来るものです。自分がへりくだって歩んでいる中で、主が下さるものです。

⁶ 別の箇所でも、「あなたは、メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である」と言っておられるとおりです。

メルキゼデクの例、あるいは「位」と訳してもいいですが、この祭司職において、イエス様はとこしえの祭司となっておられます。詩篇 110 篇にあります。ヘブル書の著者は、7 章から、この人について詳しく語り始めます。イエス様がなぜ、大祭司としての資格が、しかもとこしえの祭司なのかを説明します。

2C 苦しみの中での従順 7-10

⁷ キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。⁸ キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び、⁹ 完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり、¹⁰ メルキゼデクの例に倣い、神によって大祭司と呼ばれました。

午前礼拝の説教をぜひお聞きください。そこで、肉体を取られたキリストが、いかに大祭司と呼ばれるようになったのか、その過程を詳しく説明させていただきました。

私たちは、イエス様について、どうしても何か超人的なことを想像してしまいます。イエス様は神ご自身でありながら、完全に肉体を持っておられた人であることを忘れてはいけません。ですから、

死への恐れがあります。そして、泣き叫びもあります。そして、祈りと願いを熱心に献げておられました。このようにして、主は苦しみの中で、人が神に従う時の従順を学ばれました。そして、最後の最後まで従順であられたので、完全な者、完全に成熟した者となられたのです。そして、この方が、十字架における死を全うされたので、よみがえられ、そして永遠の救いの源となっておられます。このことについても、午前礼拝で話しましたが、救われたけれども、その効力が途中でなくなっていく、減じることはないのです。永遠に救うのです。

そして 10 節、このようにして主は、メルキゼデクの位にしたがって、神によって大祭司となりました。このことをじっくり語りたいと著者は願っています。

2A 固い食物 11-14

ところが、ここで中断します。その理由を述べます。

¹¹ このメルキゼデクについて、私たちには話すことがたくさんありますが、説き明かすことは困難です。あなたがたが、聞くことに対して鈍くなっているからです。

メルキゼデクについて、7 章以降でたくさん語り始めます。けれども、その説き明かしに困難さを感じています。その大きな理由が、「聞くことに対して鈍くなっている」ということです。

著者が、この手紙の受け取り手である、ユダヤ人信者に対して抱いている心配、懸念を、ずっと話してきていました。「こんなにすばらしい救いをないがしろにしている」(2:3)、「あなたがたのうちに、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。(3:12)」などがあります。そして、荒野で死んでいった世代のことを思い出させて、「みことばが、聞いた人たちに信仰によって結びつけられなかったから」と言っていました(4:2)。そしてここでは、みことばについて、聞くことに対して鈍くなっていて、聖書にある神の真理について、深く語る語ることができていないという問題です。

ユダヤ人の信者にとって、何が耳を鈍くさせているかと言えば、ユダヤ教の中にあるしきたりです。これらさえ行っていれば、自分はきちんとしたユダヤ人であり、そしてきちんとしていれば、神の国にそのまま入れるという思いです。私たちに当てはめるのであれば、日ごろから行っていることを前と変わらずに行っていれば、それが機械的になっていることに気にせずに行っていれば、それでよいということになります。しかし、私たちは前回、4 章で、聖霊が語られる声を、みことばを通して聞いていかなければいけないことを学びました。みことばを、キリストへの信頼をもって聞いていき、それが自分の行いを改めさせ、歩みも新たにしていこうとしないといけません。それが、いつもしていることで、事足りていると思っているのです。

そうした、マンネリ化した生活は、人の霊の耳を鈍くさせます。しばしば、預言者は、耳が鈍くなっている人々にどう語ればよいか、困難を覚えることがありました。エゼキエルは、人々の注目を集めるために、粘土板にエルサレムを描き、その包囲網を貼って、陣営を設けて、城壁崩しをしろと主から命じられました。一人で、プラモ遊びに興じている男の子のようなことをするように命じられました。そして、左脇を下にして、390 日を数え、それが終わったら右脇を下にして 40 日を数えます。これらはみな、耳が鈍くなってしまった、イスラエルの民の注意を引き寄せるためです。

エルサレムがバビロンに包囲されて破壊された後に、エゼキエルは再び預言を行います。すでにバビロンに捕え移された人々に、今度はエルサレムが回復する預言を行います。ところが、彼らは捕囚の生活がすでに慣れていて、マンネリ化していたのです。このように主は、エゼキエルに語っています。「エゼ 33:30-32 人の子よ。あなたの民の者たちは城壁のそばや家々の戸口で、あなたについてこう語り合っている。『さあ、どんなことばが【主】から出るか聞きに行こう。』彼らは群れをなしてあなたのもとにやって来る。そして、わたしの民はあなたの前に座り、あなたのことばを聞く。しかし、それを実行しようとはしない。彼らは口で甘いことばを語り、心で利得を追っている。あなたは彼らにとっては、音楽に合わせて美しく歌う恋の歌のようだ。彼らはあなたのことばを聞くが、それを実行しようとはしない。」主のことばは聞いているのですが、心は鈍くなっており、そのことばはただの歌謡曲のようにしか聞こえていないのです。

イエス様は、同じような問題に直面しました。群衆は主のことばを聞きに来ているのですが、譬えに切り替えました。種蒔きの譬えから語られました。その時に十に弟子たちだけを集めて、こう言われました。「マル 4:11 あなたがたには神の国の奥義が与えられていますが、外の人たちには、すべてがたとえで語られるのです。それはこうあるからです。『彼らは、見るには見るが知ることはなく、聞くには聞くが悟ることはない。彼らが立ち返って赦されることのないように。』」主は、何度となく、「聞く耳のある者は聞きなさい。」と言われましたが、聞く耳を持っている人は多くはなく、それで、だれでも分かる種蒔きの風景を用いて語られました。けれども、主のそばにいる者たちだけに、悟りが与えられている者たちだけに、その説き明かしをされたのです。

このように、聞いてはいても、悟ることがないのは、聞いていること自体が目的になっていて、それを信仰をもって受け入れて、主の御声に応じようとしていないからに他なりません。どうしたら、自分の耳が鈍いか分かる方法があります。それが次です。

12a あなたがたは、年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神が告げたことばの初歩を、もう一度だれかに教えてもらう必要があります。

「年数からすれば教師になっていなければならない」というのは、すでに、主のみことばを聞いているのであれば、その知識があれば、教師になっていてもおかしくないぐらい聞いてきたのに、と

言いかえることができます。すべての人が教師になる必要はありません。教師に召されている人とそうでない人がいます。けれども、すべての人が伝道者に召されていないけれども、すべての人が伝道するように命じられているのと同じように、初心者の人に、自分が教えることについては、弟子を造りなさいと主が命じられているのに、受け身のままで終わっている可能性があります。

教会は、何か良い話を受講して聞いているようなものではありません。自分自身が当事者である、生きた信仰共同体です。自分自身がその中で関わっていき、自分自身がキリストのみからだにあって成長している一部分なのです。エペソ 4 章にある、教会の姿を見てみましょう。「エペ 4:12-13 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。」牧師また教師の働きによって、みことばに養われて、聖徒たちは自分自身が整えられて、奉仕の働きをします。御霊の賜物を用いて、主に仕えて、その中で互いに愛し合い、仕え合うなかで、全体としてキリストのからだとして、その身丈にまで達するというのが、教会です。良いお話を講師の先生から聞けたということではありません。

みことばがそれだけ多く聞いているのに、そうっていないのは、繰り返しますが、聞いて、信じて、それを行おうとしていないからです。そして、なぜ行おうとしていないかという、自分のライフスタイルを変えたくないからです。その決まったパターンがあって、主のみこころにかなっていないのかどうかさえ、吟味することがなくなっています。そうすると、いつまで聞いても成長しないのです。

そして、「神が告げたことばの初歩を、もう一度だれかに教えてもらう必要があります。」と言っています。

この初歩とは、次の 6 章の初めに書かれています。「6:1-2 ですから私たちは、キリストについての初歩の教えを後にして、成熟を目指して進むではありませんか。死んだ行いからの回心、神に対する信仰、きよめの洗いについての教えと手を置く儀式、死者の復活と永遠のさばきなど、基礎的なことをもう一度やり直したりしないようにしましょう。」これらは、私たち異邦人のキリスト者とは、初歩の教えとしては若干違います。ユダヤ人の信者であるので、すでにユダヤ教の中で教えられていて、それでイエスを信じる信仰によって、それが確かなものとなったというたぐいのものです。

例えば、きよめの洗いと訳されているものは、イエスの名によって水の中に入るということで、バプテスマのことを示しています。彼らは元々、水の洗いがあったので、水の中に入ること自体は、全く違和感がなかったのです。けれども、私たちにとっては、全身水の中に入るというのは、驚くべきことです。これまでの宗教観は、少しお祓いしてもらって、表面をちょこっと、さっさと清めてもらう、という意味合いですね。けれども、自分が全く新しくされたという、一新をバプテスマは示しています。それから、死者からの復活や永遠のさばきも、異邦人の私たちからすると、真新しい教えのよ

うに聞こえます。輪廻転生の死生観で育っている私たちには、斬新に聞こえますが、ユダヤ人にとっては固く信じていたことでした。だから、パウロは、カイサリアで総督の前で弁明する時に、先祖たちが信じていることで、自分は訴えられているのだと訴えていました。

彼らは、信仰生活において、これらのユダヤ教にもある教えや実践をイエスにあって実現しているところから離れ、ユダヤ教のしきたりに次第に戻ってしまっていたので、それで、その初歩をもう一度、イエスにあって成就していることを教えてもらわないといけない状態だったのです。

私たちにとって、それは何でしょうか？例えば、神の愛を、どのように理解しているのでしょうか？初めは、罪がすべて赦されたところにある神の愛を知ります。これは、信仰の年数がどれだけ経っても、決して強調しすぎることはない、大切な教え、真理です。そして、主はありのままの私を、そのまま受け入れてくださいます。しかし、神の愛に留まることについては、どこまで学んでいるのでしょうか？神の愛に留まるとは、神が愛であるように、自分も愛に満たされていることです。神の愛に満たされる時に、自分が心の中心にいることはできなくなります。だれかのことが大好きで、それで自分のことばかり考えることはできないでしょう。その人のことを考えるので、自分のことは忘れてしまいます。同じように、神に愛されていることを知っている者は、神を心と尽くして、思いを尽くして、力を尽くして愛したいと願います。それから、神の愛しておられる人々を自分も愛したいと願うようになります。自分から思いが離れて、神へ思いが行き、それから神の愛されている人々に思いが行きます。これが、愛にあって成長することですね。

けれども、もし私たちが、日本人の宗教観と同じように留まっていたらどうなるでしょうか？神々とは軽い付き合いで終わっているのが日本人です。年に一度、初詣で、手を叩いて祈願したら、それで一年の神々との付き合いは終わるのです。そこまで行かなくとも、自分のイエス様への思いが自分だけのところで完結していて、主が何をしておられるのか？には目が届かない。そして、目の前にいる教会の仲間には、目が届かない。教会は、お寺や神社にお参りに行くのと、頻度の差こそあれ、ほとんど変わらないということであれば、実は自分が、まだ神の愛をそのまますべて心から受け入れていない、という初歩的な問題があることに気づくのです。

^{12b} あなたがたは固い食物ではなく、乳が必要になっています。¹³ 乳を飲んでいる者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。

みことばの教えについて、堅い食物と乳に例えています。乳を飲んでいるというのは、まだ義の教えに通じていないということです。ユダヤ人にとっては、乳とは、ユダヤ教にある数々のおしえやしきたりのことです。それを行っていても、義の教えに通じていないということが十分に起こります。預言者たちは、何度となく、彼らが多くのいけにえを献げても、それが必ずしも主を喜ばせていることになっていないことを指摘しました。ミカの預言を読みます。「ミカ 6:7-8【主】は幾千の雄羊、幾

万の油を喜ばれるだろうか。私の背きのために、私の長子を、私のたましいの罪のために、胎の実を献げるべきだろうか。主はあなたに告げられた。人よ、何が良いことなのか、【主】があなたに何を求めておられるのかを。それは、ただ公正を行い、誠実を愛し、へりくだって、あなたの神とともに歩むことではないか。」公正や誠実、へりくだりなど、これらは義の教えです。それらがなおがしろにされて、いけにえを献げることについては熱心である、という問題であります。

同じ表現が、今度は、異邦人が多くいたコリントの教会でも、パウロが使っていました。「I コリ 3:1-3 兄弟たち。私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語るができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。」妬みや争いがありました。だから、まだ義の教えに通じていなかった、堅い食物を食べていませんでした。

もし、信仰を持ったばかりの人たちが、まだ義の教えに通じておらず、世の人と変わらないことをしているのであれば、仕方がない面があります。けれども、年数が経っているのに、未だ、世の人と変わらないことをしていたら、それは悲劇です。例えば、哺乳瓶を、乳児がくわえていたらかわいらしいですが、それを 20 代の青年がくわえていたら、見るに耐えないのと同じです。

ここで、固い食物というのが、情報や知識のことだと思ったら、それは間違いです。聖書の知識をよく知っている人々がいても、その人に、義の実が結ばれていなかったら、その人は依然として、幼子のままなのです。むしろ、コリントの教会であれば、彼らは非常に知識に豊かな人々でした。けれども、それはキリストにある知識ではなく、世の知識でした。「あなたは、世の中のこと知らないね。」と、マウンティングする人は世の中にたくさんいます。教会でもやる人がいれば、自分が果たして、きちんとキリストの上に立っているかどうか吟味したほうがいいでしょう。

固い食物という表現にあるように、そこには、しっかりと噛むという忍耐があります。そのまま、呑み込むことができないのです。そして、感情を刺激することもあまりありません。また知性に刺激的でないこともあるかもしれません。感覚には訴えていなくとも、それでも、自分の身体をしっかりと健康に保つように、自分の霊的なバランス感覚を養っていています。一言でいえば、キリストのお姿に、自分の深いところで変えられて行っているということです。

私がキリストにあって、みなさんに強くお勧めすることは、「しっかりと地道に前に進む」ということです。多くの人が、一足飛びを好みます。例えば、聖書にある神のご計画全体を知るということで、聖書全体では何を語っているのか？一時間で、聖書全体を知る、何が書いてあるのか？という動画があります。それを参考にするのは良いことでしょう。けれども、それがもてはやされている

のは、違和感があります。なぜか？聖書を把握することが目的になっていて、それはみこころにかなっていないからです。神に語られていることで、私たちはわからないことがたくさんあります。そのわからないことに対して、わからないままにして、それでも主が言われているのだから受け入れます、ということは、聖書をそのまま読んでいくしかないのです。そして、聖書の目的はそこに書いてあることを頭で把握することではなく、全知全能の神の前にへりくだり、ひれ伏すことなのです。

ですから、固い食物を食べることは地味です。少しずつしか前進が見られません。けれども、そこに誇りをもってください。私も、みなさんが前進していることを、主にあって見て、喜んでいきます。

¹⁴ 固い食物は、善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人のものです。

これが、固い食物の定義です。善と悪を見分ける感覚があります。神こそが善悪の知識を持っておられます。自分で善と悪を知るのではなく、神とキリストの知識に満たされて、それで善と悪を身に着けているといったほうがいいでしょう。次に、経験によって訓練されています。例えば、大人は、何でもかんでも、物を口に入れることはありません。それは食べてよいものかどうかを判断します。でも、赤ん坊や幼子は何でも口に入れようとしますね。まだ善悪の感覚を経験によって訓練されていないからです。そしてそれが、大人の姿です。

そして霊的にも同じことが言えます。いろいろな教えの風が教会に吹いています。いろいろな価値観の嵐が、社会や世界に吹き荒れています。それに対抗するには、その教えや価値観がいかに間違っているかを明らかにするだけでなく、いやそれ以上に、何が最も大切なことかを見分けることであります。そのためには、固い食物を食べていくことです。